

人道的帝国主義がリビアの悪夢を生み出した

[Chris Hedges: Humanitarian Imperialism Created the Libyan Nightmare –
scheerpost.com](https://www.scheerpost.com)

クリス・ヘッジ

シア・ポスト 2023年9月17日

リード

NATO は 2011 年にリビアに軍事介入し、ムアンマル・カダフィ政権を打倒した。その結果、混沌とした殺人的な破綻国家が誕生した。リビアの人々は、この大惨事のために恐ろしい代償を払っている。

私たちは来た、見た、彼は死んだ。

これはヒラリー・クリントンが、2011 年にムアンマル・カダフィが 7 ヶ月に及ぶ米国と NATO の空爆の末に打倒され、銃剣で彼を凌辱した暴徒によって殺害されたとき口にした、有名な言葉だ。

しかし、死んだのはカダフィだけではない。リビアはかつてアフリカで最も繁栄し、最も安定した国のひとつだった。医療と教育が無料であり、すべての国民が家を持つ権利があり、電気、水道、ガソリンに補助金が支給されていた。乳幼児死亡率はアフリカ大陸で最も低く、平均寿命はアフリカ大陸で最も長かった。

識字率が最も高い国のひとつであった。

それにもかかわらず、戦乱に巻き込まれた。リビアでは現在、2つの政権が覇権を争っており、ならず者の

民兵も多数存在する。欧米の介入後の混乱で、国内の兵器庫から武器が盗まれ、ブラックマーケットに溢れ、その多くがイスラム国などのグループに奪われた。

市民社会は機能しなくなった。ジャーナリストたちは、ナイジェリア、セネガル、エリトリアからの移民が殴打され、畑や建設現場に奴隷として売られていく姿をとらえた。電力網、帯水層、油田、ダムなど、リビアのインフラは荒廃した。

そしてついに、暴風雨ダニエルがリビアを襲った。ダニエルのもたらした豪雨は、東部一帯を廃墟に変えた。大もとの原因は気候危機だが、それは先進国からアフリカへのもうひとつの贈り物だった。

老朽化した2つのダムが決壊した。高さ3メートルの水の壁が押し寄せ、デルナ港とベンガジ港が洪水に見舞われた。デルナ市長のアブドゥルメナム・アル・ガイティによれば、ダニエルは死者20,000人、行方不明者10,000人を出した。世界気象機関事務局長のペッテリ・タアラス教授はこう語った。

「リビアの災害管理・災害対応機構の分散化とインフラの劣化が、深刻さを増長させた。政治情勢がそのリスクに拍車をかけた」
タアラス氏は先週木曜日、記者団に対し語った。

「通常運行されている気象予報制度があれば、人的被害の大部分は避けられただろう。必要な警告を発し、緊急事態を発動し、住民を避難させることができただろう」

西側諸国が強制した政権交代は、R2P（Responsibility to Protect：保護責任）の原則の下、人権の名の下に統一された安定した国家リビアを無惨に破壊した。洪水被害者は、災害救援を存在しないものとした我々の「人道的介入」によってもたらされた何万人ものリビアの死者の一部に過ぎない。リビアの苦しみが長期化した責任は、われわれにある。誰かが迫害されているかどうかは関係ない。迫害されている人々を救うという名目で、ひとたびその国に大混乱を引き起こせば、その禍根は10年を超えて残っていく。そのうちに、私たちはその国の存在を忘れてしまう。

カール・ポパーは『開かれた社会とその敵』の中で、ユートピア思想的操作（utopian engineering）に警鐘を鳴らしている。ユートピア思想的操作とは、大規模な社会変革のことを指す。ほとんどの場合、特定の理論が力づくで植え付

けられ、「自分たちには啓示された真理が備わっている」と信じる人々によって導かれる。

このようなユートピア信奉者は、自分たちのビジョンを達成するために、既存のシステム、制度、社会的・文化的構造を徹底的に破壊する。壮大なビジョンの障害となる、漸進的で断片的な改革は嫌われる。既存のトライアンドエラーのメカニズムも解体される。

人類歴史には、ジャコバン、共産主義者、ファシストと呼ばれる人々がいた。そして現代では、グローバリストあるいは「新自由主義的帝国主義者」といった、殺人的なユートピア信奉者が数多く存在する。

リビアは、イラクやアフガニスタンと同様、人道的介入主義者が売り込んだ欺瞞的攻撃の犠牲者になった。この際の人道的介入主義者とはバラク・オバマ、ヒラリー・クリントン、ベン・ローズ、サマンサ・パワー、スーザン・ライスといった面々である。

オバマ政権は、反政府勢力がアメリカの言いなりになると信じ、彼らを武装させ、支援した。その結果がこういうことである。オバマは最近の

投稿で、援助機関をサポートし、リビアの人々の苦しみを和らげるよう人々に呼びかけた。

この12年間、リビアでの暴力が直接的、間接的にもたらしたリビアでの死傷者の公式集計はない。これは、NATOが2011年にリビアを7カ月にわたって空爆した結果、死傷者が出たにもかかわらず、その調査を怠ったことも理由となっている。しかし、死傷者の総数は数万人に上るだろう。

「武力行動」(Action on Armed Violence)報告は、2011年から2020年までの「リビアにおける激しい暴力による死傷者は8,518人」と記録しており、そのうち6,027人が民間人の犠牲者であった。

2020年、国連7機関が発表した声明は次のように報告している。

「9年前の紛争開始以来、40万人近いリビア人が避難を余儀なくされた。そのうちの約半数は、この1年以内、首都トリポリへの攻撃が始まって以来の間に集中している」

この攻撃はカリファ・ベルカシム・ハフタル元帥の軍によるものである。

世界銀行は今年4月にこう報告している。

「リビア経済は（内戦）、COVID-19の流行、ロシアのウクライナ侵攻によって打撃を受けている」。

この国の脆弱性は、経済的・社会的に広範囲に影響を及ぼしている。一人当たりGDPは2011年から2020年の間に50%減少した。もし経済が紛争前のトレンドに沿っていれば68%増加していたであろう。紛争がなければリビアの一人当たり所得は118%増加した可能性がある。2022年の経済成長は、紛争に起因する石油生産の中断により、低水準で不安定なままであった。

アムネスティ・インターナショナルの2022年リビア報告書もまた、厳しい内容となっている。

「民兵、武装集団、治安部隊は、何千人もの人々を恣意的に拘束し続けた。...多数の抗議者、弁護士、ジャーナリスト、批評家、活動家が検挙され、拷問やその他の虐待、強制失踪、カメラの前での自白の強要を受けた」

アムネスティは、民兵が処罰されないまま活動し、誘拐や性的暴力を含

む人権侵害が蔓延している国だと述べている。

「さらに、EUが資金提供するリビアの沿岸警備隊と安定化支援機構（Stability Support Authority）の民兵が、何千人もの難民や移民を海上で阻止し、強制的にリビアの収容施設に戻した。拘束された移民や難民は、拷問、不法な殺害、性的暴力、強制労働の対象となった」

国連リビア支援団（UNSMIL）の報告も悲惨なものだ。15万トンから20万トンと推定される武器と弾薬の備蓄がリビアから略奪され、その多くが近隣諸国に密輸された。マリでは、リビアからの武器がトゥアレグ族による反乱を煽り、国を不安定化させた。最終的には軍事クーデターと、トゥアレグ族に取って代わるジハード主義者の反乱を引き起こし、マリ政府とジハード主義者の間で戦争が長期化した。

これがまたフランスの軍事介入を引き起こし、40万人が避難を余儀なくされた。リビアからの武器や弾薬は、チャド、ニジェール、ナイジェリア、ブルキナファソなど、サヘルの他の地域にも持ち込まれた。

バラバラになったリビアから飛び散った悲惨と殺戮は、民主化、国家建設、法の支配の推進、人権の名の下に放たれた。ベンガジを掌握した反乱軍による首都トリポリ襲撃は、「カダフィがベンガジを攻撃して市民を虐殺する軍事作戦を開始しようとしている」という口実だった。

それは恐ろしいデマだった。同じたぐいのデマが20年前にも撒き散らされた。「サダム・フセインが大量破壊兵器を保有している」というデマ攻撃だった。それは、100万人以上の死者と数百万人以上の難民を生んだイラク攻撃を敢行する口実となった。

それは「ユートピア思想による社会操作」のもうひとつの例だった。

今から37年前の1986年、米軍機がリビアのカダフィの自宅を爆撃した。1995年4月、その自宅の焼け跡の近くで、わたし（筆者）は2時間にわたってインタビューした。カダフィは、次のように語った。私とフセイン（イラク大統領）が標的にされたのは、どちらも残忍であったかも知れないが、自国民に何をしたからではない。私たちが標的にされたのは、私たちの国が大量の石

油を埋蔵し、欧米の支配から独立していたからである。

私たちは欧米の石油消費国と再交渉し、自国にとってより有利な契約を行い、中国とロシアに石油契約を与えた。私はまた、ロシア艦隊にベンガジ港へのアクセス権も与えた。

カダフィが反政府軍によって虐殺された時の米國務長官ヒラリー・クリントンのメールがある。それは情報公開請求で入手され、ウィキリークスによって公開されたものである。そのメールは、カダフィが「フランス語圏のアフリカ諸国にフランスフラン（CFA）に代わる通貨を提供」しようとしていることに対するフランスの懸念をあからさまに記している。

クリントンの長年のアドバイザーであったシドニー・ブルメンソールのメールもある。それは、フランスの情報将校との会話について報告している。内容はリビア攻撃の首謀者であるサルコジ仏大統領がどういう動機で動いたか、についてである。ブルメンソールは次のように述べている。

「フランス大統領は、リビアの石油に対するシェア拡大、この地域におけるフランスの影響力の増大、リビア国内における政治的地位の向上、フランスの軍事力の再強化、そして“フランス語圏アフリカ”においてフランスの影響力にとって代わろうとするカダフィの企てに終止符を打つことを求めている」

サルコジ大統領はすでに、汚職と選挙資金規正法違反の2つの別件で有罪判決を受けている。しかしまだある。サルコジは2007年の大統領選を成功させるために、ガダフィから秘密裏に数百万ユーロの違法な選挙資金を受け取ったとされている。その疑いで、2025年に歴史的な裁判に直面することとなっている。

これがリビアにおける本当の「犯罪」である。しかし、本当の犯罪は常に隠されたままであり、民主主義や人権に関する華麗なレトリックによって覆い隠されている。

【仮訳 鈴木頌】

筆者のクリス・ヘッジ氏は、米国のジャーナリスト。もとニューヨークタイムズの中東支局長などを務めた。

